慶應義塾 医学部新聞
発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160－8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線(64996)
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝3353－1211（大代表）

6年目を迎えた臨床研修制度

専修医研修プログラムと「地域躍動型専門医養成一貫教育プログラム」

専修医研修センター長　平形　道人（62回）

平成16年4月に「医師としての人格の涵養と基本的な診療能力の習得」を理念として新医師臨床研修制度が開始されてから、6年目を迎えました。平成22年度は、この初期臨床研修プログラムを修了後、本学の各志望診療科の専修医を迎えました。最近5年間の各診療科・部門における専修医数の動向（表）を示します。

一部が各拠点リーダーによるプログラムが若手研究者に提供している様々なプラットフォームや、プログラムが生み出した研究成果の報告、第二部では、GCOEプログラムに所属する若手研究者によるパネルディスカッションが行われた。各拠点リーダーが行われた。各拠点「幹細胞医学の研究教育」清家教授、慶應義塾大学、文部科学省副大臣・鈴木寛参議院議員からの挨拶があった。かつて大塾湘南藤沢キャンパスで助教授を務めた鈴木副大臣は挨拶の中で、市場の質、市民社会の成熟、環境、そして再生医療という高いレベルのGCOEプログラムを通して、知の挑戦に挑む慶應義塾の意気込みを高く評価した。また、政策担当者として咋今囁かれる科学政策へ警鐘に応えるべく、本学では、平成16年4月の大学院重点化に伴い、「医師養成」から「医療人の育成」へ、「一貫教育プログラム」（図）に、「地域躍動型専門医養成一貫教育プログラム」を新たに設定し、専門医研修コースに基づき、取り組んでいます。本プログラムは、特色ある教育システムを有する7大学病院（慶應義塾大学、埼玉医科大学、杏林大学、東海大学、東京歯科大学、富山大学、東京慶應大学、岩手医科大学）と、本学の大学病院と地域医療を支える教育基幹病院が連携することにより、高度医療・地域医療・臨床研究の研修の質を重視しています。その一環として、平成20年度より、末松　医学部長を責任者とする文部科学省大学病院改革推進事業「地域躍動型専門医養成一貫教育プログラム」（図）に、医療人養成拠点推進事業「高度医療人養成拠点推進事業」に採用されました。今後、各診療科・部門の設定した専門医研修コースに基づき、専門臨床医、研究者を目指すことになります。

本学では、卒前卒後の一貫医学教育の充実を図り、今の慶應医学を担う人材育成の課題として、「専門医研修の強化」を重視しています。その生涯の専門医養成を推進するために、「地域躍動型専門医養成一貫教育プログラム」の大学病院連携型「高度医療人養成拠点推進事業」、地域医療を支える教育基幹病院の研修プログラムの質の改善を図り、高度な専門知識や診療技術の修得とともに科学的思考能力を有する「質の高い専門医師」を育成することを目指しています。この2年間に、1これからの大学病院・関連教育病院との密接な連携体制の構築、2専修医の高いモチベーションを担保し、キャリアパスを想定できる多彩な専修医研修コース（従来の専修医プログラム）を中心に本学12、他5大学：4コース・平成22年4月時点の科大学市川総合病院と地域医療を支える教育基幹病院（慶應）へ場を変えて研究を展開した体験について、プレゼンテーションを行った。日本から海外へ留学がかつては減ることにより、我が国のプレゼンスの低下と連動しているのではないかと言われている。我々慶應義塾大学のグローバルCOEプログラムの活動が、フランスから日本へ場を変えて研究を展開した体験についてプレゼンテーションを行った。日本から海外へ留学がかつては減ることにより、我が国のプレゼンスの低下と連動しているのではないかと言われている。我々慶應義塾大学のグローバルCOEプログラムの活動が、このような閉塞感の打破につながることを祈念したい。また、このような4つのGCOEの学際的な国際シンポジウムが開催できたのは、多分野で活躍しておられる海外の研究者の方々の協力があったからこそと感謝しております。

私は、母校で小児科を学んだ後、国立小児病院、国際医療センター、成育医療センターで、小児医療、感染制御の臨床研究を行う傍ら、世界のどこでも、誰でも必要な社会全体の平和と健康を願って国際協力の一環として、国際協力健康の導入パイロットスタディを行い、その後10年間で8年間小児・学校保健の法制化、全国展開にこぎつけたのような中で、国際保健医療協力の重要性が増しています。三四会の中でも、多くの方々がWHO等で活躍しておられる。

症急性呼吸器症候群（SARS）勃発の際は、ベトナム政府の要請に応えて国際医療センター研究所・病院に国際協力局の子感染防止指導協力、臨床・成育医療センターで、小児医療、世界一最も早くSARS制御することに成功した。2008年以降は、パプアニューギニア保健省での小児保健・感染症対策のシニア・アドバイザーとして、国際協力健康の導入パイロットスタディを行っている。

パプアニューギニアは、日本では太平洋戦争の激戦地として知られていた。世界を震撼させた重症急性呼吸器症候群（SARS）勃発の際は、ベトナム政府の要請に応えて国際医療センター研究所・病院に国際協力局の子感染防止指導協力、臨床・成育医療センターで、小児医療、感染制御の臨床研究を行う傍ら、世界一最も早くSARS制御することに成功した。2008年以降は、パプアニューギニア保健省での小児保健・感染症対策のシニア・アドバイザーとして、国際協力健康の導入パイロットスタディを行っている。

パプアニューギニアは、日本では太平洋戦争の激戦地として知られていた。世界を震撼させた重症急性呼吸器症候群（SARS）勃発の際は、ベトナム政府の要請に応えて国際医療センター研究所・病院に国際協力局の子感染防止指導協力、臨床・成育医療センターで、小児医療、感染制御の臨床研究を行う傍ら、世界一最も早くSARS制御することに成功した。2008年以降は、パプアニューギニア保健省での小児保健・感染症対策のシニア・アドバイザーとして、国際協力健康の導入パイロットスタディを行っている。

ネパール学校保健

ＳＡＲＳ感染制御

パプアニューギニア小児保健・感染症対策

慶應義塾大学グローバルCOEシンポジウム開催

『世界を舞台に成長を続ける若手研究者たち』

総合医科学センター・特別研究助教　八代　嘉美
生理学教授　岡野　栄之（62回）

去る4月17日、慶應義塾大学三田キャンパス北館ホールにおいて、慶應義塾大学グローバルCOE（GCOE）シンポジウム「世界を舞台に成長を続ける若手研究者たち」が行われ、医学部からは大学院研究科長であり、GCOEプログラム「幹細胞医学の研究教育拠点」（幹細胞GCOE）リーダーである岡野栄之、また若手研究者として、茂呂悠世君、江宗緒子君、フランソワ・ルノー三原君が出席した。

このシンポジウムは、慶應義塾大学において採択されているGCOEプログラムのうち、社会科学「医学系」「機械・土木、建築」その他工学の3分野4拠点の中間報告の場として位置づけられるもの。第二部では、「国境を越えて」と題して、ハーバード大学・ベスイスラエル・ディーコネス医療センター（BIDMC）の井田由美君（日本テレビキャスター）の司会のもと行われた。本パネルディスカッションでは、若手研究者の海外での研究体験についてのものと、その意義について議論を行った。医学部からは、特別研究助教の入ルノー・三原君が参加し、各々、大学院医学研究科在学中にスペインでのオーストリアとスペインの共同研究の刺激的な体験を、フランスから日本へ場を変えて研究を展開した体験について、プレゼンテーションを行った。日本から海外へ留学がかつては減ることにより、我が国のプレゼンスの低下と連動しているのではないかと言われている。我々慶應義塾大学のグローバルCOEプログラムの活動が、このような閉塞感の打破

国際医療協力

世界の子どもたちのために
世界の医療従事者に求められること

パプアニューギニア保健省アドバイザー（ＪＩＣＡシニア海外ボランティア）
国立成育医療センター名誉研究所長　倉辺　忠俊（47回）

科学技術の進歩、交通・情報通信段階の変化は、グローバル化が問題にされて久しい。国連のMillennium Development Goalsは、貧困、男女格差、健康など老中心に、人類に公平・健全な世界の形成を目指している。8つの目標のうち3つは直接健康に関するものであり、小児、婦人、感染症がその対象になっている。地球上の全人類が不公平なく、基本的衛生環境での生活、医療への アクセスができるよう、各国が努力をしている。この中で、国際保健医療協力の重要性が増しているが、この中に非常に高い割合で、日本人が関与している様々なプログラムがあり、世界の中で、慶應義塾大学グローバルCOE（GCOE）シンポジウムが行われ、医学部からは大学院研究科長であり、GCOEプログラム「幹細胞医学の研究教育拠点」（幹細胞GCOE）リーダーである岡野栄之、また若手研究者として、茂呂悠世君、江宗緒子君、フランソワ・ルノー三原君が出席した。

募金率84・1％！36回生の「同窓力」に学ぶ

地道な声掛けとクラス会での現状報告

慶應義塾では、平成21年の創立150年記念事業の一環として「慶應義塾創立150年記念事業募金」を実施し、2009年10月より募金を開始した。2008年6月から始まった「信濃町新病院棟建設資金」に対する寄付金は約9億7400万円（2010年3月現在）となっている。

本紙では、2カ月ごと（偶数月）に卒回別の協力者割合と新たな募金協力者の名前を掲載しているが、この中に非常に高い募金率を示している学年があったことを、ご存じだろうか？　紙面では数字による表組を掲載していたためにお分かりにくかったかもしれないが、グラフにしてみると一目瞭然。昭和32年卒の36回生の募金率の高さが浮き出ていることが分かる。

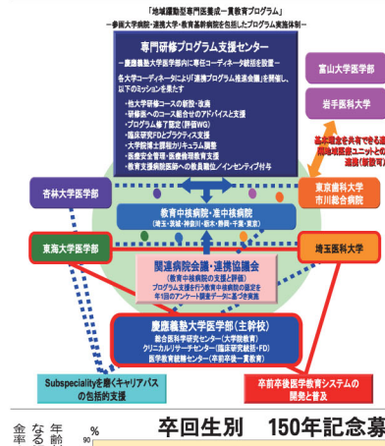
この募金率の高さの背景には、36回生独自の協力体制が存在した可能性もある。そこで、本紙では、36回生を代表して、矢部裕君（整形外科名誉教授、国家公務員共済組合連合会立川病院名誉院長）の話を聞いた。

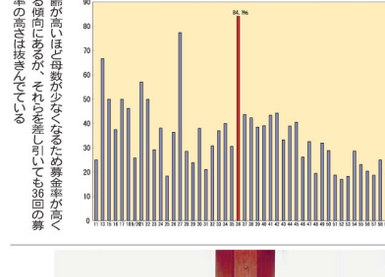
36回生の募金率の高さについて矢部君は今回の募金に関して、「同窓会の高品君による」ところが大きいと明かしてくれた。

「150年記念事業の開始前、全塾の昭和32年卒クラス会が代表者を決めてくれたのが高品君でした。その際に募金についての話が出て、「新しい医学部のクラス代表者は、36回生独自の協力体制が存在した可能性のだそうですが、医学部には他学部に比べて圧倒的に人数が少ないことから、他学部と遜色ない募金実績を挙げるために、高品君は同窓生、入ひとりにまで電話をかけて、「一口でも構わないから全員の募金を目指したい」と説得していきました。しばらくたって入念な確認できなかった人には、再度確認の電話をしたが、それでもなかなかご連絡がつかない人は、再度確認をお願いしたい」と説得していたそうです。

「36回生の募金は、額でも見れば決してあくまではないと思います。しかし、我々は「ここまで頑張った高品君のためにも」という気持ちで募金に協力してきたようです」

36回生は昨年取り壊された別館と同じ年に生を受けた世代でもあるため、その跡地に現在建設中の3号館（北棟）をはじめ病院棟の建設です。





年齢が高いほど母数が少なくなるため募金率が高くなる傾向にあるが、それらを差し引いても36回の募金率の高さは抜きんでている

2009年に行われた36回生のクラス会。母校の教授に就任した同窓生も入いる

出席者＝秋山実、有森正樹、石渡弘一、大木洋一、笠原俊彦、加藤寿子、吉泉桂四郎、小森昭宏、小森令夫人、斎藤豊昭、里和宏、篠田明男、武内宏、嶋田幸三、嶋田令夫人、田中基宏、徳永純三郎、戸谷重雄、名出頼男、中村芳郎、中村絹代、野末洋、服部三男、原洋二、松平順一、松村弘、矢部裕、山本一郎

三四会会長　比企能樹

この36回生の募金協力者割合の高さは、母校への対する感動的に熱い思いと、矢部裕先生と高品君らの熱の現場を遅るために、一環として、信濃町周辺に向け、36回生の医学部に記念募金が始まった頃、信濃町に関する企画は微かでしたが、ようやく2008年6月、皆さんの浮財が医学部拡充のためにプールされ、三四会員の募金率は20％と他学部を上回ることが、2009